

欧州馬術レポート

週刊 Gallop 2021 年 5 月号掲載



日本中央競馬会所属

◆佐々紫苑

(さっさ・しおん)

1995年東京都生まれ。早稲田大学卒。2012年全日本ジュニアライダー総合馬術選手権優勝。15、16年全日本ヤングライダー総合馬術選手権連覇。20年4月にJRA日本中央競馬会入会。17年より日本馬術連盟アンバサダーライダー。

馬心伝心 —奮闘記partⅡ—

佐々紫苑

Shion Sassa



暑い夏に向かって髪をバッサリ、とは人間の話。これとは逆に、馬術競技の馬たちは寒い時期に毛刈りをします。昨年12月のコラムで高田選手もふれていましたが、馬は冬になると体温を保つため、モコモコの冬毛が全身に生えてきます。現役を引退した馬や海外にいる野生の馬などは、冬毛のまま冬を越しますが、運動量の多い現役の競技馬たちは汗で体が冷えないように、冬毛を刈って体の表面をつるつる

の状態に保ちます。そして冬毛の代わりに、暖かい馬着（馬用コート）を着せてあげます。多い時には月に1度、馬用のバリカンを使って全身を刈りこみます。短い毛が洋服や目の中に飛んでくるので厄介な作業ですが、馬を美しく保つことや馬の健康管理も乗り手とグルームの大事な仕事です。これからのように暑くなれば、この作業もひと休み、短い夏毛の季節になります。

ここで一つ、たてがみと同様、馬のシンボルでもある長い尻尾の豆知識を。あのふさふさの長い尻尾、実はお尻の上の部分から直接生えているのではなく、尻尾の真ん中あたりまで「^{びこん}尾根」と呼ばれる芯があり、そこから毛が生えているのです。尻尾を上を持ち上げてお尻を洗ってあげるときなど、裏側から見るとよくわかります。興奮して尻尾を立てたり、まとわりつく虫を払ったり、馬の尻尾は尾根のおかげで自在に動かすことができるんですよ。



毛刈りの様子（左）と尻尾の裏側、こうなっています！（右）（本人提供）

Let's enjoy Dressage

高田茉莉亜

Maria Takada



アイリッシュアラン乗馬学校所属

◆高田茉莉亜

(たかだ・まりあ)

1994年東京都生まれ。慶應義塾大学卒。2010、11年に全日本ジュニアライダー馬場馬術選手権連覇。16年の全日本ヤングライダー馬場馬術選手権で史上初の4連覇を達成した。17年より日本馬術連盟アンバサダーライダー。

みなさんは馬の尻尾をよく見たことがありますか？馬の尻尾は、お尻の付け根から太めの毛が束になってきれいに垂れ下がっています。その毛質や毛量は馬ごとに違います。以前、クードラパン（馬名の由来：フランス語で「ウサギの尻尾」という競走馬の尻尾が他の馬より特に短く話題になりました。

馬場馬術は演技の美しさや正確さを競う採点競技で、人馬ともに身だしなみを整えて競技に出場します。騎手はえんぴ服やジャケット、白いキュロット（乗馬ズボン）などの正装で臨み、馬をよくブラッシングして毛並みを整え、たてがみもきれいに編み、尻尾もブラシでとかして長さを整えます。身だしなみは採点基準には入りませんが、演技をより美しく見せるためにもとても重要なポイントなんです！

毛量が多く、ツヤツヤとして、長さが整っている立派な尻尾は、馬場馬術の競技中にしなやかに揺れることでとてもエレガントに見え、美しさが倍増します。そんなことから、私たちも尻尾のケアには日々細心の注意を払い、毛が抜けないように丁寧にブラシをし、時にはシャンプーをして清潔な状態を保つことを心掛けています。

とはいえ、生まれながらにして尻尾の毛量が少なかったり、何かしらの事情で毛が抜けてしまう馬も多くなります。そんな馬たちのために、ヨーロッパでは尻尾エクステがとてもメジャーで、私の愛馬ブリタニアも大会ではこの尻尾エクステを付けて出場しています。



エクステを付ける前と後のビフォーアフター！驚くほど印象が変わります（本人提供）